# 長町女腹切

## 上之巻

例の童の言の葉に、言よる品もよし蘆の、難波の京の物語今の狂歌の取りなせし、京童の口吟、落首洛外とりぐに、その一節を繪双紙や、下立賣を堀河へ、引廻したる角屋敷、刀屋石見何某とて諸役御免の受領職、折紙太刀の御用迄、御所は勿論屋敷方、男たる身の魂の、御刀脇差拵請取所と大看板、見世は弟子に打任せ、誰が下人やら頭やら、咄し目貫の性よしも、つい焼つけて悪性に、身を研ぎへらす奉公や。跡のこじりの帳面に、つばめ合せと親方が、鞘鳴するぞ道理なり。主人石見は禪門の、白い天窓に黒眼、仕事場を見廻つて、「ヤア己が足音聞たやら、皆細工に精が出るよ。煙草ばかりが仕事じやないぞ。彼岸過ぎたりやめつきりと日が短かい。夜仕事さしよにも此油の高さでは儲ける程皆戻る。ヤ戻る次手に戻橋の鍔は戻つたか。一條の御所樣の菊鍔も、九

例の童―京童が大阪にて心中せんとせしお花半七の事を噂する落首―洛中にかく

繪双紙―下立賣と續けて繪双紙賣ときかす

一條の御所樣―御所の御紋十六菊なれば云ふ、九月も其緣

月の御用じや合點か。黑鞘が出來たらば、烏丸殿へ渡しておじや。二口屋のはみ出し、猪熊の革づか、なぜに遲いと毎日二三度使が走る。醒が井の親粒もまだ入れてやるまいな。三條小橋の下細工菖蒲作りの拵も、五月からの誂へ、何として出來ぬぞ。長刀直しを研だらば、辨慶山の町へ持て往け。兩替町の銀作り、御池の町のふち頭、小川通りのせかいらぎ、今日明日に持たしてやれ。さつきに來せた下の町の酒屋のかみ、入婿が入る引出物にしたいが、娘が望む道具じやと、大切先の大刀物、身ばかり買ふて去れたは、後家鞘に極まつた。、堅い親仁の輕口も、刀屋とてや古身なり。重手代の忠二郎、旦那の前に帳面挖へ　介喜八は算盤の、さどんの九月節句前、算用の高見合して、主ヤア此半七の大のらめ、帳面も埒明ず、今朝から爰へ頻出しせぬ。何所へうせた。又祇園狂ひか宮川町か繩手か、朋輩共が知つておろ。詮索せい」と喚かるゝ。手「イヤ半七は昨日から頭痛するとて鉢卷で、小座敷に寢て居まする」主「なんじや頭痛じや。若い身で又しては、頭痛のつかへの何のとは、皆茶屋酒が過るから。粥でも焚いて喰はしたか」手「アイ粥の事は扨置き、おも湯も咽へ通らぬと云ふて、やう〳〵と今朝酒の燗して飲んで見て、どふでも色のない酒は飲まれぬと、苦い顔しながら中椀にたつた三杯」と、云へば主も興さめて、

黑鞘―黑の緣に烏丸
はみだし鐔―楕圓形にて小柄をさす處の型形、食わにかく
醒ケ井―鮫にかく
三條小橋―檜の下、五月は菖蒲の緣にて菖蒲革の誂を云ふ
せかいちぎ―蟻鮫の革
後家鞘―刀の身なく鞘計りなるをいふ
宮川町―齊遊笑覽に、男色は京師にては宮川町とあり
色のない酒―妓の居ちぬ酒

愛宕詣に—松の葉葉に有る句を取つて御花の身の上を祝く
上盛り—若盛り
中ごと正銘—眞實深い中と云ふを刀の中身にかく
ぼんぼり綿—綿帽子の縁く透したるもの
ひねくろし—老くちし
御座りんす—ござりますの里詞
忌月—九月は忌み慎むべき月
山崎—山程ある にかく

叱る心も拍子ぬけ、笑ひ暮せし秋の日の、西山近き染浴衣、愛宕參りに袖を引れた、是も仇なる世の勤め。四條の水に名を流し、身の憂數を積あげし、石懸町の井筒屋のお花、よ盛り戀盛り、身を賣品はかはれども、刀屋の半七と深い中ごと正銘の、互の誠と締た心のもろひねり。其柄糸のほつれそめ、我親ざめの情なさを、問ひ談合も中絶へし、いとし男も親方がかり、首尾はどふぞと案じほれ、顔の見たさも遣瀬なく、鶯籠見雇ふて草鞋がけ、浴衣を假の旅出立、ぼんぼり綿もひねくろしく、背中に皺の寄るべなき、石見の見世へ 芵「頼みませふ。ハヽこりや旦那さんで御座りんすか。内方に居さんす半七殿に、一寸逢ひたふ御座りんす」親方ぎよつとし、芵「はていかふりんすくと云ふ女子じや。和女は半七が女房か」芵「ハアつがもない私は大坂者、半七が伯母で御座りんす」芵「アレまだりんすじや。ムウ大坂の伯母御とは、伽羅細工の甚五郎の内儀か」芵「アヽ伽羅々々何かのお禮にとふ參る筈なれ共、主は細工の人だから、貧な世帶の際なしで、今日迄の御無沙汰。大事の甥が出世の門、忌ひ月を心掛、愛宕かけての登舟、乘合の窮屈さ。とろくと寢よとすりや、後からせゝるやら、前からは毛の生へた、大きな足を突出すやら、齒切をするやら寢言やら、可笑いことの數々は、山崎から連もあり、あがつてお

おこゝ—御飯、俚言集覽にごゞと二字濁云々しんどう—せつない、中國方言色さらしな—姨捨山の歌と渡逢綱の伯母とを寄せたり

山を一息に、嵯峨へ下たりや仕合と、釋迦樣の開帳の、相伴やらおこゞやら、旅籠屋で支度して、直に是へ」と出次第の、口は手管に馴々しく、「皆樣御免ァ、しんどう」と腰かけて、煙管取手も粗略に、「皆樣半七の朋輩衆か。しんくな仕事で御座りんす」繻子の肌着に色さらしなの、伯母と名乘て刀屋に、見するは迂散物なりし。主「ソレ喜八伯母が逢に登られたと、半七に知らせてやれ。誰ぞ茶を進ぜぬか。幾人をつても氣が附ぬ」と、云ふ内に半七は、そつと起て障子のすき、覗けば馴染のお花なり。半「南無三寶扨は内々苦勞にした、慾づらの繼父めが、年切埒のもがりごと、急々にせがむと見へた。其工面に來たそふな。何にもせよ出過ぎたこと。逢も危なし逢はぬも又、仕舞の附ぬ我身ぞ」と、夜着引被り生たる心地はなかりけり。親方は正直一ぺん、「半七はなぜ出ぬぞ。頭痛でまだ起られぬか。他人では無し、なふ伯母御、寢所へいて逢はつしやれ。お山狂ひで酒やら何やら過る故、煩ひ暮して物も喰はぬ。少意見して下され。そりやそこへ案内せい」と、下地は好に据る膳、廿ひ首尾とぞ成にける。やゝ時過て是も又、愛宕參りの花お札、風呂敷包下人に持せ、女「刀屋の石見樣とはこなたか。大坂甚五郎が女房半七に逢ひたい。伯母が來たとおつしやれて下され」と、云ひ入れば家内の上下愕然して、「ヤァこりや何じや。門にも伯母

下地は好—諺、逢ひたきお花が我側に來るを云ふ

ひの上云々―樋の上の名物昆布

いはれぬ―いちざち

信國―初代山城の刀匠名は了戒

内にも伯母、騙子か狐に極つた」と、不審がるやら怖がるやら、中にも亭主は一理屈、「さはざはと囂い。奥へ聞へりや詮議がならぬ。默れ〳〵」と小聲にて、「表の伯母御通らしやれ。爰へ〳〵」と云はるゝにぞ、綿帽子取て從容に、旦「是はまあ〳〵、結構なるお内方。ついしか御出入申さねば、何方樣が誰樣やら、コレ其所な前髪殿、盆一枚貸つしやれ。私が事なりや心迄、奥樣へ上まするひの上の切荒布、花の都へこんな物、お恥かしや」と差し出す。伯母の年ばい格好を、見ればどこやら面相も、半七によく似たり。扨は奥なは似せ物めと、思へども念の爲、主「是は〳〵いはれぬこと。女房共は寺參り、戻つたら見せませふ。してつきも鹽もなふ半七に、何用有て登られた」と、云へば伯母は打笑ひ、旦「いや半七にさのみ用もなけれ共、旦那樣へ少しお賴み申事。連合甚五郎登らるゝ筈なれ共、お屋敷方の御用は多し、飛脚でも如何とて、扨私が登りし」と、下人に持せし風呂敷より、棒鞘の一腰を取出し、「是は是信國とや去大名の若殿へ藏屋敷から上らるゝ、大切な拵物、大坂にも彼是と職人衆も多けれど、京細工と申甥子が爲、内方へ賴みます。注文は此通り。さぞ方々の請取、御忙しいは存じながら、どうぞ近々に賴上まする。此次手に半七めが顏も見たさ。何やかやに登りました」と差出せば、石見は脇指注文見合、

「是は此方の商賣。心得た」とずつと立て、「是伯母御、戀しがらるゝ甥がざまを見せませふ。暫く其處に」と云ひ捨て、思ひ掛なき一間の障子、蹴破ってつゝと入る。二人は「はつ」と驚いて、狼狽廻る胸ぐら兩手に摑んで、主「ヤイ半七のいきずりめ、よふも〳〵親方を踏附たな。あの女が來た時からござりんすが呑込まれぬ。りんすの正躰顯れた。お山やら惣嫁やら、厚皮頰な晝日中、大坂の伯母で候と、目利の家へ似せ物を、ぬく〳〵と寢所へ迄手引させ、主に一杯、汝めは甘い所を喰ふたな。親代々の刀屋を太鼓持にするのみか、座敷を揚屋に仕くさつた。お禮申す」と突倒し、えさし靠追取て、さん〴〵に打敲く。伯母は此躰聞くよりも、はつと人目の恥かしさ。憎うもあれど甥子が難儀、思ひやられて何とがな、此場の首尾をと氣を碎く。半七花は身の科を、云ひ瞞めんと眞顏にて、半「申申旦那樣、お氣が違ひはしませぬか。私は兎も角も、伯母者人を打擲あり。必ず後悔なさるゝな」と云はせも果ず、主「ヤア盜人猛々敷く、其姿になつてさへまだ惣嫁めを勞はるか。主の身代空になし天道をかすめをる。ヤイ天罰と云ふもので、大坂の伯母が登られた。目の前へ連ていて、敲き殺して腹をいる。サアうせぬか」と杖振上、はた〳〵と打つ音に、伯母は悲しく走りより、「旦那樣暫らく」と、取附ば振放し、縋りつけば突倒し、と

いきずり―いきは黑齬、すりは掏摸

御禮申―禮えて居れを反對に云ふ

合點せず―了解せず

ついどーとんと

まんまとくひ―甘く欺かれ

けんどん―慳貪に蕎麥の名を掛けていふ

かふする間に思案して、旦「ヤア、こりやお吉か。そなたは此所へどふして來た。コレ申し旦那樣。あれは私が妹」と、云へば旦那は興さめ顏。半七は猶合點せず。花はきよろきよろ狼狽る、袖を扣へて、旦「コリヤ妹、ヤイお吉是姉じや。姉が顏を見忘れたか。狼狽者」と、睨つけ、目まぜで知らすれば、やう〳〵と心附、花「ハアほんに姉樣。姉樣々々じや」と、云ふ聲慄ふ計りなり。伯母は色目を曉られじと、「五條の木賃宿へ行きはせで、姉さへついど來ぬ內へ、騙子らしいこと云ふて來た故にこんなこと。旦那樣のお山じやと御覽じたも御尤。今日も愛宕で私をお袋とはか云ひませぬ。それも道理じや　あの人は腹がはりの兄弟で、十五違ひ。半七が爲には伯母なれど、年は甥より二ッ下。伯母甥の好とて、親うするを知らぬ目で、女夫と見るに咎はなし」と、非の入りそふな事どもを、云くろめたる情の程、二人はあつと嬉しさも、夢に夢見る如くぞや。主の石見まんまとくひ、「ムヽウ二人ながら伯母御か。よい年して不調法。過まつた免してもらを。伯母御怪我は無つたか」と、脊中按れば彼方向く。主「ヲヽ、若い人の道理々々。そちらな伯母樣賴みます。機嫌取て下され。是半七、言分してくれ」と、もじ〳〵と勝手へ出、「皆の奴等うつかりと、なぜ茶漬でもして出さぬ。腹の立た揚句じやに、けんどんを取りに遣れ。マア盃を出してを

みしらした―愛憎な目に逢はせた

きと行つまつた―分別の道たくさい

厄體もなき―好もなき

身をうつ―身を棄つる

け。むつかしからふ己は出見世へいてゐるぞ。はれやれ腹の立つ勢ひ口に、伯母をも知らいでみしらした」と、足早にこそ出にけれ。跡見送つて半七は、伯母の前に手を支へ、「何にも態と申しませぬ。面目ないと有難いと、胸は二ツに裂ます」と、悔み歎けばお花も涙に染々と、「私は四條石懸町、井筒屋と云ふ茶屋に花と申す勤の者。半七樣とは末々まで面倒見あふ契約に、ちといき詰つた憂ふしの談合に、逢いで叶はぬ事あつて横着な此有樣。伯母樣なら大事の甥を、唆かすとのお憎しみ、そこも許して下さんせ。いとしいが只因果ぞ」と、共に嘆ちて泣きければ、伯母も同じ涙にくれ、「そう見たく。連合は大坂で伽羅屋といへば、町によい衆屋敷方、人に知られて世の憂無情、此伯母とても知つて居る。色事は若い役、此上にどのやうな、生る死ぬるの場になりても、厄體もない氣を持つまいぞ。世間多い心中も、銀と不孝に名を流し、戀で死ぬるは一人もない。流れの身には取分けて、悲しい事酷い事、そこを死ぬが心中ぞや。眞實男可愛くば、五度逢ふものを三度逢ひ、二度を一度になす時は、親方も機嫌よく、戀に身をうつ事もない。二親もない半七、伯母一人甥一人、元は知行も取た筋、職人の弟子と朽果れど、可愛ひとも不便とも、思ふ者は此伯母一人、末かけて賴みます。今日伯母が登らずば、二

親は泣寄—諺、親は泣寄他人は食寄

持砲—將軍の鐵砲を預り旗本を警むる役とりうり—取次いで賣る

歯も立ぬ—柄にもなき

人の命は有るまいもの。有難や忝なや。愛宕參りの一驗、佛神のお蔭ぞ」と、意見も親は泣寄の、二人が肝に堪へつゝ、泣くより外の事ぞなき。伯母は重ねて、「やれ半七、泪ついでに今一度、泣ねばならぬ此脇指、見知てゐるか」と差出せば、半七棒鞘の柄引ぬき、中子を見れば信國、裏目釘の穴際に、風と云ふ字の一字銘。横手を拍て、「是は扨、我家の重代ぞや。親の秘藏が年を經て、巡り來るも不思議なり。二度武士に立返る、瑞相なり嬉しや」と、推戴く脇指を、伯母引とつてからりと投げ、「なふ情なのさぶらひや。武士になれとて見せはせぬ、此脇指故、家筋のかう零落た因緣咄、小耳にも聞きつらん。お花とやらも繋がる人、悲しい咄の一通りを聞いてたも。もと我々は伊勢の龜山者。先祖は猪瀬文平とて、あの子が爲には祖父樣、お持砲の鐵砲大將百五十石取た人、おなじ家中に高木宮内とて、八百石取る旗頭。互ひに無二の中なりしが、上方のとりうりが、此脇指を賣りに來て、諸朋輩の附合に祖父樣も望みにて、買求めたい心ざし。彼の高木も望をかけ、代物問へば三百貫の折紙。心安さの當座の座興、とは云ひながら高木が飛忽、文平お身の身代では、高い物じやがお買るかと、ふつと云ひしも互ひの不運。苦笑ひにて一座は濟み、その取沙汰の國一杯。いはれぬ猪瀬が歯も立ぬ、刄物好して高知行の、高

木殿と張合て人中で恥辱うけ、あれでも武士かと言囃す。此脇指を買いでは、一分立ぬ祖父様の、武具馬具衣裳夜の物まで代なして、三百貫の折紙代一倍まし、二百拾兩に買求め、直に中心に一字銘、高木に勝との心にて、風と云ふ字を彫記し、明れば九月十五日、登城の道に待うけ、高木遣ぬと聲をかけ、尋常に討おほせ、屋敷へ歸つて祖父様は、娘子供に暇乞、命に替し此信國、必らず人手に渡すなと、お腹へぐつと押立て、右の脇まで一筋に、唯一言の義に依て身上を果されたり。其方の父様は、伯母が爲には兄様、その折しも江戸番、直に江戸より浪人あり、永々の憂苦勞、悲しい暮しが病となり、彌憂き其中にも、遺言にて此脇指、乞食するまで離すなと、藥も飲ず祖父様の第三年同じ月に病死ぞや。悲しいとも憂いとも、情なやお袋も又歎き死。跡に殘るは伯母と其方、まだ九ツの頑是なし。伯母が心を推量あれ。三年に三人まで、同じ月に死ぬる事、不思議と思ふ氣が付て、刄物の相性見る人に、日利して貰ひしに、祖父様父様同じ火性、刀は水の流れ燒、以ての外の不吉の脇指、寸は一尺四寸五分けん尺は災難、是を其儘持ならば、三代迄は祟るとある。占に懲いて、捨賣に賣放し、廻り廻つて十三年め、お屋敷方より此脇指拵へ仰付られて、孫子の其方の眼にかゝると、はや親方の打擲の難儀に

寸、けん尺＝刀の長さ

逢ふも此の不思議。武士羨しと思やんな。一言の咎より、親祖父の命を絶ち、子孫まで零落しは、前世の業とは思へども、愚痴な心に淺ましい、此脇指がないならばと、科ない又物に恨が残り、折ても捨たい氣なれども、今では大名のお腰の物、家の敵の此脇指、主人の樣に撫擦る、その時々の身過ほど、悲しい物はなきぞよ。子にも甥にも唯一人、奉公大事に勤めてたも。いとしの身や」と搔口説、膝に凭れて泣きければ、半七も伏沈み、お花ものかぬ身の上と、語るも聞くも主の内、頷き合つ吁きの、忍び泪ぞ哀なる。伯「ヤアうか〳〵叫してあれ見世さし時。伯母は直に伏見まで、夜中でも船はある。來年のお秡には必らず下りや。此脇指の拵、注文の通り隨分急いで下してたも。旦那殿内方樣へ能樣に賴むぞや。お花女郎にも緣でがな、又頓てや」と出ければ、芹「イヤ私も東、道までお供致しましよ」伯「アヽ、折角來て素戻りか。これ半七伯母は粹じや。跡でしつぽりと咄しやいの」半「イヤ〳〵別に咄す事もござりませぬ」伯「そんなら祝ふて口濡して去しや」半「イヤ最早お茶も飲ました」伯「ハテ茶ばかりで濟むものか。しんこの樣な物なりと、茶の子甥の子、のこ〳〵振舞や半七」と、二人引寄せ寢所の、障子の中に押入れて、伯母は氣とほり堀河通り、二條通りの高瀬舟、直に大坂へ三重下りける。

見世さし時―夕暮
お秡―姪子甥の祭日、商家は十月廿日、正月十日
縁でがな―縁もあらば
しんこ―饅餅、お花に振舞へと也

名は堅く—石懸の名は堅けれど遊廓故人は和ぐ　ぼんと町—ポンと沈むるにかく　半—半七　やつち—八つ乳房ある猫皮の三味線　光満寺—来んにいひかく　撞木杖—丁字形の杖

山葵おろし云々—おろし金にておき玉子を摩る如し　花車—青銅にて請車周旋する女

## 中の巻

名は堅く、人は和ぐ石懸町。前には戀の底深き、淵に憂身をぼんと町。都の四季の月花を、爰にとどめて通路や。馴染々々の色遊びの、中にお花は忘れても、忘れがたなや刀屋の、半と深きつま戀に、なつくやつぢの繼三味線、心くらべの連引に、思ひの色を忍び駒、忍ぶに餘る涙かな。浮氣烏とそやされて、月夜も闇も此里へ、光滿寺と云ふ坊主客、お花に馴し鶯の、ほけきやうとも念佛とも、知らぬが佛の戸帳ぞと、井筒が咳籏撞木杖にてひらりと上げ、「太郎内にか。四五日お目にぶらさがらぬ」太「エヽ珍しいどつち風が吹たぞい」坊「イヤ〳〵どつち風でもない。今夜はしよざいの無常風。沙汰はない事葬禮の戻り、ちよつと寄たし心はせく。どふせふか斯ふ燒香場を、う〳〵に遣てすて、引導も何云ふたやら。不便や今日の亡者も、碌な所へ往くまい。是もお花へ心中」と、雪の頬さき遠慮なく、鬚口寄せて頬ずりは、山葵おろしにぬきの玉子、痛そな顔の痛々し。お花が浮ぬ顔付に、花車も亭主も氣の毒がり、「コレお花どふぞいの。お寺ならば大黒、爰ではわつさり惠比壽顔して見せましや。サア笑やいの」と迫立れば、坊「アヽ太郎おだまり

おじゃり。あれは我等に甘へるの。腹立所が猶うまし。噪衆二階へ連ておじや。今夜は妓衆の惣揚見事な事か。古手の肴取をいて蒲燒一種で呑明す。鰻四五本さかせに遣や。南無阿彌陀佛」と騒ぎ立、皆々二階へ上りける。既に傾く宵月の、夜もはや四ツ。半七は銀の才覺ならず者と、茶屋にはせかれ、親方に見限られつゝ筒井筒、心の水もかへ干て、流れ歩きにとぼ〳〵と、格子の影に身を潛め、お花が便を待居たる。爰に誰とは白髪まじり、きんか天窓に無用の灯燈、門口にてふつと消し、「ハァ太郎左衛門樣お宿にか。花めが父西陣の九兵衛でござる」と、たつみ上りに言ひければ、亭主夫婦、「ヤァ親仁來てか。こちへこちへ」と茶釜の前。太郎左衛門顔顰め、「此頃段々云ふ通り、そなたが娘お花が事、そもそも小めろの時分から、手形の表丸七年、親方に損をかけず。追付年季も明くぞや。なれども勤のならひ、小間物屋の煙草屋の紙屋で候、吳服屋で候の、すのこんにやくのと借錢が今の金で七八兩。その上親仁も長者ではなし。あの子にかゝる身でないか。がらり廿兩ま一年切まし、居なりに居れば借錢も先其分。賣買高い此節貳貫目ぢかい廿兩、其方が手取に溫まれば兩爲と思ひ世話やけども、かの柄卷屋の半七と云ふ蟲が差て、何の彼のと入性根、お花が一切呑込ぬ。是からは勝手次第。半七と云ふ職人の弟子、爰らあた

心の水もかへ干す—道樂をしつくす

きんか頭—禿頭

たつみ上り—居丈高

すの蒲鉾—何やかや

二貫目云々—金一兩に六十目替の處物價騰貴故廿兩に二貫目も出す

りの拂ひさへ埒明ず、東ふさがりになつた者、打みしやいでもつぶ三文ないは知て居る。あの樣なごくどうと腐り合た、お花が行末流浪は知れた事。少さいからの剛柔なればよい事聞く樣にはござらぬ。どふぞ意見でも召れぬか。壁に馬乘かけては明べき埒も明ぬもの。前びろに手形しやう爲に、呼に遣た」と語りける。門口には半七、聞けば悲しさ無念さの、格子の柱嚙ひしぎ　齒を咥しばり泣居たる。親仁は横手ちやうど打て、「扨々苦々しい。親方殿にお世話をかけ、不孝者と申そふか。その刀屋め知て居る。無賴者の大將孤被りの下地。イヤ花めはどれに居る。爰へ來い用が有る。引ずりに往てお客の前で恥かゝそうか」と、昔作りのつこど聲。お花は人目の恥かしく、「アイあの盃藤さんさよさん預かつて下んせ」と言すて降る箱階梯。「ヤア父さんか。夜更て何しにごんした」と、傍へ寄るを突倒し、父「ヤイ不孝者、親方殿お話しで一から十迄聞屆けた。半七めと云ふ騙子めと夫婦にしては、年寄た此親が鼻の下が干あがる。廿兩と云ふ金が天から降るか地から湧か。かたりめが挨拶はらりしやんと切てしまひ、年切增て奉公するか。否と言へ分別有り。サア〳〵どふじや」と腕捲り、攝み付くべき顏色なり。お花は「はつ」と胸塞がり、暫し泪にくれけるが、「なふ父さん、朋輩衆は內證、客さん達の手前もあり。さもしい事

打みしやいでも―打ち潰しても

壁に馬―難、火急に云ひてはの意

孤被り―乞丐

つこど聲―尖り聲

さもしい―淺ましい

を言はんする。勤する身の親達は、どの口聞ても可愛や親ゆへ苦勞をする。定めの年も近づく、屆いた男を見定め、末の片附心がけ、身を安樂にして見せいと、云はぬ親は御座らぬ。節季々々にせびらかし、足いで又年を切まし、男に迄添せまいとはあんまり酷ふござんする。ほんの親より繼父は猶大事と嗜み、隨分孝行盡せども、こなさん私にみぢんも憐れみはござんせぬ。殺しなりと何樣なりと、分別次第にさあんせ。半七樣と挨拶切り、勸はせぬ」と計りにて、人目も恥ず大聲あげ、身を悶へてぞ泣き居たる。傍若無人の繼父冷笑ひ、「よふ吐すな。盜人の晝寢も當がある。汝が母に何の見込はなけれども、汝を賣て喰ふ爲女夫になつた。今の詞は誰が敎へた。半七のすりめにならふたか。べり〳〵しやべる頰げた、蹴放いて仕舞ん」と、武者ぶり付を井筒屋夫婦、「年の内はこちの物。疵付させぬ」と挽放す。九「思ふ男に添れぬからは殺しや〳〵」父「ヲヽ、殺しかねふか」と、擲合捻合大喧嘩。破れかぶれと半七、裾引括げ井筒屋の、庭へつか〳〵つか、「柄卷屋の半七」と聲をかけ、九兵衞を取て突のけ、眞中にどつかと座り、半「コレ親仁、其方はお花が繼父、すにつけ紛につけ憎いのも理り。此半七をすりの騙子のがんどうのとは、いつ騙りした盜みした。半七が目には其方を人賣と見たもがりと見た。よし夫は兎も角も、お花は己が女

盜人の晝寢―諺、晝寢るは夜働く爲

がんどう―強盜

もがり―かたり

しゅす髮―艷を出して固めたる髮
天窓付云々―頭付金持風に見ゆれど内證は貧乏
べかこ―目赤うの轉にて赤目ぢやとなり

房。すべい奉公仕舞ふては、繼父殿でござらふが、もがり殿でござらふが、主のある女房、分別して物を云へ」と、せきくる顔の青疊、叩き散して詰かくる。九「ムヽウ刀屋の半七とは其方か、どれ顔見よう。はれよい男の、江戸元結にしゆす鬢、天窓付は兩替町、内證は曾我殿、見せかけ力身をいてくれ。此年迄敗毒散一服飲ぬ此親仁、ゆすりはたべぬ。アヽ慮外ながら、親も許さぬ女房とは、粟田口へ往きたいか。此娘女房に持てば小判がいるが合點か。小豆粒程な細金さへない態で、なんじやお花を女房じや。いきがたりとは其事。いつそ手を能ふ巾着か、屋尻切れ」とぞ喚きける。半七ぐつと急あけ、「ムヽウよふ云ふた。小豆粒は持ねども、小判と云物持て居る。來年の給分廿兩渡すからは、お花は身が女房」と、紙入より金廿兩取出し、「サア金でした小判と云ふ物、近付になつてをけ」と、眞向に投つくる。九「ヤイ半七、あの娘はまだ五十年が百年が、顔に色氣の有る中は、奉公さして喰ねばならぬ。千兩道具の娘を、廿兩の目腐金で、女房に持ふや。べかこ、まあなるまい。何所で盜んでうせたやら、後の詮索喧しい。汝に呉る」と投つくる。半「イヤ金貰ふは好みがない。汝に呉る」と投返し、投つけ打つけ摑みあひ お花は「わつ」と泣出す。太郎左衛門つつ立、「コレ半七、お花はこちの奉公人。親仁とのせりふなら、何所ぞ外で

仕たが能い、門には大勢人たかり、客の邪魔して貰ふまい。それ男共追出せ」心得太兵衛長兵衛五介、ばら〳〵と立かゝり、無理無體に引出す、お花はわけも正體も、涙ながらに取付を、「どこへ〳〵」と押分る、親仁を中の關守の、雪駄片足になら草履、足にはたらぬ半七が、髻を摑んで引立しは、目もあてられぬ次第なり。太「サア親仁も先づ歸つて、諸事談合は明日の事」九「ハツアそれもそふ。然らば明日參りませう。申すまでも及ばぬが、花めを敷居より外へ手放して下さるな。ヤイそこな不孝者、汝明日來てなんとする待ておれ。エヽ息せい張て喝が渦く」と、ごぶり〳〵と熱ばなの、茶びん天窓を振立て、河原を西へと歸りける。斯る哀の最中、二階の階子ぐわた〳〵〳〵、藪から坊主の佛頂顔、坊「お花そこに何して居る。先の押への盃は、いつの世に戻る事。惣體今夜は和女が顔、浮々せいで酒が呑ぬ。氣を替て西石懸の關東屋で騷がふ。太郎山衆貸してたも」太「ハア殘りの子供は西石懸が天竺へも御同道。お花一人は我等が内、手放しては内證に氣遣ありまの」坊「いふな〳〵。皆迄云ふな湯のだんこか。湯治するなら遣ひ錢、見事な事か」と金三兩、衣の下より取出せば、太「是こそほんの忝け有馬の湯のだんこ、やれゆのだんこゆのだんこ。今はありまのゆのだんこ、しよんがゑ。西石懸へ」と騷ぎける。同じ所も西側は、祇園丸山

親仁を中の―半七とお花との間に鎮居れば云ふ

茶瓶天窓―藥鑵天窓、茶を呑むに言ひかく

皆迄云な云々―そんな事いはずともよしと也

忝け有馬の云々―小唄の意をとつてお花を偽に渡す

ほうろく頭巾―九頭巾

庭掃く人―白人に言ひかく、白人は藝なき遊女

紋紗―ものぢやに掛く

歌流金子―俳優中村歌流と金子言右衛門

長範頭巾―山法師の被る頭巾

前にうけ、芝居の櫓暗き夜も、行かふ人の灯燈は、月もおろかと照渡り、見おろす〳〵、おろす駕籠からぬつと出た。ほうろく頭巾の醫者殿は、藥師如來の引合。つぼ屋の客と脉をとる。妓「それ〳〵〳〵花車も亭主も槌で庭掃く人よびに、走る足元おかるじやないか。お玉じやないか。お玉やあい」坊「はて是から呼で屆くものか、わけもない事云はん」妓「紋紗の衣着て、ぞめき姿のの坊主。後姿見た樣な」坊「チヽそれよあれは愚僧が五人組、萬年寺の同宿、忍び戀路の摑みどり」深綠屋の小丁稚が、一中節の川風に、聲も廣がる扇屋の、仲居のまんが供して通る。「あれは澤村長十郎。あつたら男を頓て大坂へ下り舟。歌流金子も難波津へ、咲くや此花其花の、噂も戀の種ぞかし。苦のない女郎の仇口を、聞くにも增る涙の露。お花は一切氣も浮ず、四條の河原幾萬人、ぞめきの中に彼の人が、若やと目をも花色の、長範頭巾しよんぼりと、番屋の陰に佇立しは、慥にそふじや。アちよつと逢たい、云ひたい事も山棠の手前、客の手前も量りかね、床柱に打凭れ、念佛申して紛らかす。料理人の傳介盃を下に置き、「ヤア花樣の念佛で思ひ出した事がある。三味線小歌も古めかし。町方に流行る阿彌陀の光と云ふ事して、御一座の花姿樣方、誰樣にても阿彌陀如來に當つた者が、豆腐と酒と買に行く役人。色里に無いづな騷ぎ。花

姿様方いかに」と云へば「ヲヽ是は珍しい。早ふ〳〵」と紙押廣げ、蜘のす御光延紙引さいて錢の高、粤「もみ闘は恵方果報、後に無理云ふまいぞ。サア今が大事の所」と、鼠なきして しめあけに、「さよ様どふじや」「十六文」「お仕合〳〵」「藤さまは」「三十六文」「小めろの林は」「十文」「夫ははまなみさど波や、しが様たつた二文か。お[illegible]になんぼ」「悲しや己は三百じや。エヽ儘よ前垂質に置ふ迄」傾「ヲヽ云やる迄ない錢がなくば布子を、はぎさん島さん是も如來ははづれた。サア是からは花様、きり〳〵もみ闘明さんせ」ル「アヽ忙しい何ぞいの、私が様な因果人が、なんの阿彌陀になるものか。これ見さんせ」と押開けば、粤「そりやこそ云はぬか。サア花様が阿彌陀じや。名代は叶ひませぬ。花姿様に豆腐買して、居ながら田樂喰ませふ。きつう座敷が岼落て來た。サア面白い」と笑ふにぞ、お花は何がなかこつけに、出たいは心一杯。猶も色目を曉られじと、「アヽ迷惑。そんな事に今まで歩いた事なけれども、てんぽのかは往て除ふ。其間に用意してをかんせ」「ヲヽ用意楷子鉢刷題福子木しやに構へ、待て居ます早ふ〳〵」芹「ハテそこらは合點じや」と姿も下女に、二世かけし男の爲や徒歩跣足、ついに被なれぬをき手拭急げばまはる、小褄ほら〳〵杉が前垂かり橋を、足もしどろに行過る。半七は番屋の影ちらと見るより、「コレ〳〵爰に居る」と招か

十文―十文錢の裏に波型あれば云ふ

質にもかう迄―迄は強辭にて意なし

はぎさん―妓の名に刻ぐをかくそりやこそ云々―それ見たか

てんぽの皮―まま上

かり橋―借るにかけたり

れ　平「ヤア半さんかいの、逢たかつた」と抱きあひ、兎角は涙ばかりなり。半「コレ泣て居ては濟ぬ事。今宵中に大坂迄退ねばならぬ。サアおじや」と手をひけば、平「マア待たんせ。先刻の小判どふしての才覺ぞ。詮方なさに恐い事などさんせぬか。有樣云ふて落付せて下さんせ」「云ふ迄もない事。此身になつた半七を、粉に叩いても一歩一ッ誰が貸う。先度の脇指三十二兩に賣拂ひ、銘なしの下阪、寸も燒も替らぬを、八兩で買ひ替へ、貳兩で銘を彫せ、拵へ濟して大坂へ下し、其賣へぎの廿兩、たとへ首になるとても、もふ取返しのならぬ事。此上ながらも罪に遇ば我一人、伯母婚伯母にも難義をかけず、和女の行末賴むため、心ざすは大坂。誠に和女の繼父が、盜人と云ふたも虛でない。我身で我身が恐しい」と、語ればお花も身を振はし、「サアそんな事であらふと推量に違はぬ。いとしや私ゆへ種々にお身を狂はする。詮議の時は皆私が業にして身を逃れて下さんせ」半「ハテ罪に遭ふとも逃るゝとも、分隔はないはいの」平「ほんにそふじや女夫じやもの」と、又締寄せて泣く中に、跡の二階に、「花樣遲い。こりや豆腐に買れてか。迎ひに往け」と聲々の、南無三寶見付られては足元暗き、いせきの石に踏くじき、長き緋絹裏足纏ひ、走るとすれど夜中の太鼓、どん〳〵ぐりのつじを出れば建仁寺。「だらりが鳴ぞだらつくまいぞ。駕籠よ〳〵」と呼れ

下阪―刀匠、江州下阪に居る孫六の家筋

建仁寺―建仁寺の東

だらり―陀羅尼の鐘

ども、無いか聞ぬか耳塚の、西に錢座の名のみにて、小錢なければ草鞋も、二足を小判一兩で、買ふて穿身ぞ　三重　哀なり。

そち誓文―約束を履行せぬ事

## お花半七道行

いくよ〳〵の憂勤、七枚起請そら誓文、日本國の神さんを欺した罪か欺された　人の恨のねたみぐさ、ついに我身の下り舟、乘をくれたる淀堤。淀の河水行く末は、いかなる罪に大坂の　道がどこやら何里やら。身は初雁よ初霜に、寢亂れ姿忍ばしと、前垂とつて丸ぐけの、襷をじみな抱帶、しやんと結んで引締て、歩むとすれど行き馴れぬ、道はかどらぬ女旅。これも何ゆへ男山、作りし罪は山崎の、麓はあれよあはれけに、いつか都へ歸る山。春は梢にいろ〳〵の、花咲く山にと山巡り。となりは青し夏山の、かしは散るてふ卯の花や。山時鳥あひの、景色の花に顔つくる、笠を傾むけ山めぐり。秋はさやけき月影の、いたらぬ山は無れども、わけて名高き山うけの、月見る方へと山めぐり。扨又冬は遠山の、雲もてくる雲のあし、賢こき雁は南向、北を後に山をこす。山又山や峰白し。雪を誘ふて山めぐり。巡り〳〵て山姫の、山衆交りの淨瑠璃も、夕べ限り

大坂―逢ふにかくじみな抱帶―質素な風にて抱帶する山崎―山程有にかく

賢き雁云々―雁は雪を避けて南に行けど我は雪を誘うて山巡りすと也

帶の枚方―枚方の地名に平きなかく

流れ渡り云々―遊女は無情なれども中にはまこと實情あるもあり

そぎ袖―角立たぬ袖

我酒―無理酒

日文―常の文

血文―男を信じる時女の血にて書く文

いよし惚げんし愈〳〵お目にかゝつて

の口癖や。今日は姿を町風に、扮すとすれど隠れなき、帶のひらかた近くなる。松原過て河邊を見れば、あれ〳〵〳〵五ツばかりの子を眞中に、乗合舟の女夫づれ　思ひなき身の高笑ひ。餘所のつまごと浦山し。流れわたりの情であろと、網の目にさへ戀風が溜る。おぎの〳〵上風身に染々と、切て一夜は虚なしに、ほんの女夫といつの世に、いはれつ云はん情なやと、抱き締たるそぎ袖も、涙にひたす計りなり。間夫で逢ふたも一昔。それ覺へてか一昨年の、十七日のおほろ月、宵の我酒にほの〴〵と、二人火燵のじやらくらを、憎や鳥に起されて、あかぬ別れの朝より、日文ちぶみの付屆け、いよしごけんと書たるは、ほだしの種か花すゝき、ほんに誓文いとしさに、幾夜の夢を結びぶみ。方様まいる花よりと、思ひまいらせ候べくの、わけの酒盃色見へて、わきていづみの思はくは、只逢まして〳〵、又の御見をまづかしく。その言の葉も昨日といひ、今日と暮して飛鳥里、[illegible]れの里ははる〴〵と、跡にながらの夕あらし、髪のおくれのはら〳〵はら、共に亂るゝ我心。曇ある身は恐ろしの、お城も近き難波江の、よしあし知つてはまる身を、意見は釋迦に京橋の、此方の森を隠家と　暫く勞を三重晴しける

京橋―今日にかけたり

下の巻

長町—繁しにかく

[illegible]當—伽羅蓋(沈)に錄あり標り皆つる事

つがもない—[illegible]もない

急ぐとすれど秋の日の、短かきあしの難波潟。京橋より暮かゝり、問ど隱れも長町の、伯母の家作常々の、咄に大方躾當て、半「伽羅細工の甚五郎樣は此方か」と、糺明れば、「ア、いかにも是が甚五郎。何方からぞ」と云ふ伯母の聲。半「イヤ京の半七下りました」と、お花諸共つゝと入り、伯「ヤア是は〳〵珍らしい。文の來たは一昨日、間もなふ何の用あつて。ヤ連も有るそふな。誰樣じや是へ」とあいしらふ。半「伯母樣お久しうござんす。いつぞやお目にかゝつた花と申す者。御無事で目出度御座んす」と、腰打かくる二人の躰、心得がたくや思ひけん、伯「ハアよふこそ」と計りにて、不思議そうにぞ見へにける。半七色を曉られじと、「お花ことも奉公の年明、和泉の親元へ歸る道、幸ひ同道致しました。イヤ先づそれはそふ。誂への脇指。先樣は侍衆、お氣に入つたかいらぬか。萬一お氣にいらいで、甚五郎殿や伯母樣に、難儀のかゝる事あらば、其難を私が身に受けふと存じ參つた。其次第が氣遣な。どふで御座る」と言ひければ、伯「ア、爰な人つがもない。細工がお氣に入ぬとて、何の此方や其方に難儀がかゝる物ぞいの。其上悅びや。一昨日下ると其儘、お屋敷へ持參めされしに、柄まはり緣頭鞘の塗、萬事殊の外御意に入、甚五郎が女房はよい甥を持た仕合者。後々はお屋敷の御用も仰付られ、出入させとの御念比。いよ〳〵細工

に精出しや」と、聞くより二人は手を合せ、半「ヱヽ有難い忝けない。天道のお助け命拾ふた。お花悦びや」　花「嬉しうござる胸の痞がずつと下つた」伯「ヲヽ道理々々。武士を相手の商賣、大事に思ふその冥加。今日又俄にお屋敷から、脇指について何やら急なる御用とて、甚五郎殿を召に來て、晝過から參られ、今にをいて歸られぬ。定めてお悦びに刄渡しの御祝儀。お振舞が有るそうな。定めし醉て戻られふ」と、云へば半七色違へ、「ム、脇指について急用とて又呼に來ましたか。サアお花、京から道中云ふ通り、こふ有らふと思ひし事、我は是に待うけ、甚五郎殿に對面し、脇指の御祝儀身に引受て祝ひ、運に依て今夜中にお屋敷へ、召出されふも知れぬこと。和女は此邊旅籠屋に一宿し、明日はそう〳〵親元へ」と、云ふ聲付も悄々と、半「そふしては半七が一分は立たねども、アヽなんとせふ暇乞じや」と、胸に手を組み俯向て、涙を隱す計りなり。お花も涙に聲慄ひ、「聞へぬ事云ふてくだんする。悦びも悲みも、二人が身に引受る約束じやないかいの。甚五郎樣に逢まして、有無の事を聞く迄は、私や爰を動かぬ。伯母樣も女子じやが、男の一世の大事の時、見捨られふかコレ半七樣、むごい事云ふお人や」と、恨み詫ちて泣きければ、二人の顏をつくづく見て、伯「其方衆が云ふ事は、何の事やら此伯母は、すつきりと合點がいかぬ。此方

刄渡しの云々―刀が出來て持つて行けば御悦の御祝儀有り

世話やむ―世話やいて苦に病む

あぶ〳〵―ヒケヒケする

今日が暮て云々―今日が暮れたる計りに門締むるは早し

かやはかくるゝ―色こを見えね香やは隠るゝの古歌をとり、香やに蚊蠅をかく

今の世の廢物―背江下阪の刀は鼎りし事あれば用ゐぬ故

の連合甚五郎殿は、武士附合して堅い人。半七も侍筋、行儀強い若い者と、常々自慢し置しに、夫にお山を同道し、初めて對面させられふか。一町北はみな宿屋。二人ながら早ふ往て、甚五郎殿に逢たくば、半七ばかり明日をじや。夫婦にも成果せ、首尾よい後はお花とも對面さしよ。今にも歸られ此躰見せ、大事の甥を連合に、見限らするが口惜い。此世話やむも大切さ。サアはや〳〵」と氣をせけば、半「お憐みの忝けなさ、涙が溢れ有難し。然らば伯母御へ、一寸内證申す事あり」と、にじり寄れば伯「マア待や。歸られふかと思ひあぶ〳〵する」と、庭におりて耳門の懸金をしやんとかけ、「サア何事ぞ氣遣し。語りや聞ふ」と云ふ所へ、甚五郎遽だしく門叩いて、「今日が暮て門鎖る。明よ〳〵」と云ふ聲に、そりや情なや歸られた。如何せん。借屋の路次へも迴されず。押入には夜着布團、何所へ隱さんかやはかくるよ。帷子入れて夏過し、明長持に秋の鹿。つまも憧れて諸共に、押隱すこそ哀なれ。蓋を押へて聲立てまいと欠伸ながら、伯「ア、とろ〳〵と假寢の、寢耳にけはしい叩きやう」と、耳門明れば甚五郎、せきにせいたる顏色、血眼になつて駈上り、「ヤイ女房共、甥のとのに掛つて、此甚五郎が身代破滅。命の大事になつてきた。此脇指折紙付正銘の信國を、今の世の廢物下阪にすりかへ、銘を似せて突つけた。先は武家方

出入の門、盗人は女房の甥。此甚五郎が存ぜぬと云ふ言分ならず。京へ詮議に登つては欠落者と町内へ、付屆にあふては人中で口利れず。死ぬるより外文珠の智惠にも能はぬ」と、脇指からりと投出し、溜息ついたる計りなり。伯母ははつと胸塞り、扨は半七が身に覺ある詞のはし、思ひ當つて途方にくれ、暫し返答もせざりしが、半七元より覺悟の前。長持の蓋押あけ出でんとするを、睨みつけ〳〵、脇指取あげ、「なふ甚五郎殿、私は女子の物の道理は知らねども、ついて廻る身の因果は　大名高家智者學者も免れず。是は正しく半七めが業なれども、半七がして半七はせぬ心。何を隱さん元彼の信國は、常々語りし我家に、三代迄は祟ると云ふ、性にふさはぬ脇指。一目で是はと思ひしが、武士の上こそ及物の相性、町人職人に成果て、何の咎の有るべき。親もない一人の甥。是をつてに一國のお細工の得意つけたさに、私がさもしい心から、律義またい半七に、惡根性が付そめ、身の大事仕出したも、往廻つて三代目の手に觸しその祟、知つて居ながら此伯母がをし事仕たる其咎め、因果とほかは思はれぬ。恥かしゆござる甚五郎殿。男を養ふ女子も有る。廿年足ず連添て何を男の爲もせず、身の難儀をかける事、恨にあらふ憎からふ。それが悲しい面目ない。許して下され甚五郎殿」と、夫の膝にどうと伏し、聲も

をし事―惡い事と知りつゝ、働かせたる事

惜まず歎きしは、理り過て哀なり。甚五郎も男氣の、「夫婦の中に何の面目。女房の甥の仕業存ぜぬと云ふて此甚五郎が立ものか。見ず知ずにも義理に依て命を捨るは男の役。氣遣するな首切れふが、牢へいらふが皆我科に引うけ、半七に憂目は見せぬ」と、心は利發に逸れども、差當つて相手づく、思案にくれてぞ見へにける。女房は手を合せ、「アヽ情の末とて忝けない。侍衆は斯樣の事を皆御存じ、脇指の因緣を申し、伯母一人の科に落し、こなたにも半七めも、罪を脱れて下され」と、脇指取てするりと拔き、「本のは信國是は下阪。作は替れど燒刃寸尺一對なれば、一家に祟るは同じ事、是故に父樣が人を打て、其刀でまづ此樣に押肌脱ぎ、逆手にとつて左の脇ぐつと立て」と云ふ詞、直に突たて右へさつと引廻す。「是はいかに」と、甚五郎縋付ば、半七夫婦飛で出、「伯母樣狂氣か情ない。身に覺ある故に死に來た半七」と、脇指に取付を突除て、伯「ヤイたわけ者、汝を殺す程ならば、なんの伯母が長口上。自害もする物か。手の惡い事仕たれども、欠落して身も隱さず。伯母婚の難儀を思ひ身を捨に來た心。さすが筋日程あつて、切ても是はでかしたな。汝が父御は我兄樣。最期の時に預りし甥なれど、着替一ッ帶一筋、何を優しき事もなく、預りし甲斐もなかりしに、大事に替る命其方には遣ぬ。皆兄樣への奉公ぞや。伯母さへ

帶一筋―此下に與へし事なくの詞を入れて見るべし

死ぬれば科は一人に極つて、脇指は上り物、外に御詮議は殘るまい。又物の祟も三代濟む。行末日出度く出世して、親祖父の名字を繼や。サア早ふ往や〳〵」と、深手に息もきれぎれの、血汐に落る涙の體。花は「わつ」と咽返り、半七は猶涙にくれ、「伯母伯父は親同前。張付にかゝるとて、一寸も退ませぬ」と、取つけば甚五郎、「ヱ、不合點な。其方が爰に狼狽て、伯母に犬死さするか」と、二人を取て突出し、鉤鉄樞しつとおろせば、「なふそんなら退ませふ。ま一度逢せて下され」と、夫婦は門に打凭れ、聲を揚てぞ泣き居たる。伯母は苦む息づかひ、「ナフ甚五郎殿。人立のない前に早ふ死にたい。止目はどこじや〳〵」と悶ゆれば、涙ながら甚五郎、「女なれども武士の切腹。止目とは勿體なし。介錯せん」と立寄れば、爰「いや〳〵人の切つたと我切たは、疵改めに顯れて、此方の言分むづかしい。急所を教へて下され」と、男增りの自害の體。夫はいよ〳〵心くれ、「爰を〳〵」と我喉笛を、指せば頷き振上る、手も弱りはつたと落て太股に突立る。又振上れば突外し、肩先がばと突き込だり。左手へはづれ右手へはづれ苦しむ顏色。夫は悲しむ南無阿彌陀、南無阿彌陀佛の聲を力に、喉のくさりを一刀、うんと計り目もくれなゐの薄もみぢ、夜明の嵐に散失せし、墓なき最期ぞ是非なけれ。「歎きの聲は何事か」と、向ひ隣裏借屋、潛戸蹴

疵改め―疵改めの時人が切つたとあれば夫の言譯立たずと也

放し駈入て、「やれ女の腹切自害よ」と、組中年寄月行事、町代夜番が棒ちぎり木、ばつたくさばにをく霜の、墓なき命南無阿彌陀、南無阿彌陀佛疑ひなき、西方極樂淨瑠璃に、語りて哀を留めける。